
狼の赤い寄り道

餛飩粉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狼の赤い寄り道

【Nコード】

N8530Z

【作者名】

餛飩粉

【あらすじ】

群れからはぐれた狼が、やがて辿り着いた森の中で赤い頭巾を被った少女に出会う。狼の中で湧き上がる感情とは一体何なのか。少女から受け取った赤い実は何なのか。一人と一匹はどうなるのか。

童話の赤ずきんから着想を得た完全オリジナルの短編小説です。

非常に短い作品ですが連載と言う形を取らせていただきますが、本当にあつという間の作品ですので暇なときにパパーッと読んでいただければ幸いです。

一匹の狼

一匹の狼が平原を宛もなくさまよっている。灰色の毛並みを持つ、大きいとはいえない体躯の狼。

狼は、配偶者を見つけるために群れを出て行ったわけではない。目覚めたら群れからはぐれていて、ただっ広い平原に一匹で横たわっていたのだ。

平原は、群れで暮らしていたときより一層大きく感じた。群れの仲間や家族を探そうとしたが、自分の鼻が感じ取るにおいの判別に自信がなかった。

狼はまだ生まれてから二年ほどしか経っていないため、見た目こそ成熟しているが、狩りをした経験もない。

暗くなり始めた空に向かつて、生まれたときから覚えている遠吠えを何度も繰り返したが、返事は来なかった。時間だけが過ぎていき、やがて狼は眠りに落ちた。雑草の枕は、母親の腹とは違って冷たかった。毛並みの様に生えているのに、そこには体温がない。

次の日は、銃声の音で目が覚めた。飛び退くように身を起こして首を左右に振ると、少し遠くの方に鹿が一頭、それも全速力で走っている。

そのすぐ後ろに、人間がいた。狩猟者だ。今しがた発砲した銃に弾を装填している最中だった。狼の存在には、まだ気づいていないようだった。狼は慎重な足取りで人間から距離を取っていき、一瞬で踵を返した。体力のことも考えず、四本の足を全力で動かす。そうして走っているうちに狩猟者に対する恐怖は消え、気分も晴れやかになってきた。心なしか空に浮かぶ太陽が祝福しているようだった。群れで暮らしていたときは、こんな爽快な気分を味わったことなどなかった。

狼は知らず知らずのうちに、走ることの喜びを覚えた。地面を叩く四本の足、風を受けて横一線になる体毛、己の内側から疾走を鼓舞するかにように脈打つ心臓。全身が一つの塊になって、駆けてゆく。何処までも、何処までも。

そんな喜びの最中、狼は無意識のうちに獲物を探していた。首を動かし、過ぎ去っていく風景の中に腹を満たす餌を求めながら、走っていた。そして、両目が遠くで草を食べている鹿を捉えた瞬間、自然と動きを止め、姿勢を低くして身構えた。

見覚えのある鹿だ。先ほど狩人に追われ逃げ回っていたあの鹿は、群れからはぐれたのだろうか一匹で草を口に含んでいた。それほど大きくはないが、あの一匹で一週間以上は何も食べずに済む量だ。狼にとって、初めて狩りだ。それも群れで行うものではなく、孤独な狩りである。同時に、孤独な鹿を見るのも初めてだった。

まずは餌を食べている鹿に気づかれないように、ゆっくりと前進する。死角である真後ろに来るまでに、そう時間はかからなかった。周囲は平で身を隠すものはなく、距離は貪るほどある。

今気づかれたら確実に逃してしまつてであろう、絶妙にもどかしい道のりを、狼は貪るのではなく少しずつ咀嚼していった。草食動物が草や葉を口の中で時間をかけて磨り潰すように、ゆっくりと歩を刻む。

近づいていくうちに、狼はその鹿の異変に気がついた。鹿から血の臭いが漂っている。よく見ると獲物の左後ろ足に血の痕——いや、今も血が流れている。

狼は狩りの成功を確信した。それは油断だった。急ごうとする前足の爪が、小石と擦れて音を立ててしまった。

鹿の耳はそれを聞き逃さなかった。すぐさま食事を中断し、辺りを見渡した。振り返ったわけではないのに、真後ろにいたはずの狼の存在を捉えるや否やあつという間にその場から駆け出した。

遅れて、狼も後を追った。獲物に飢えた両目を頼りに、しつこく鹿の背後に食らいつく。

鹿は平原を右へ左へと走り、狼を撒こうとする。だが、足の傷のせいか、あまり速度が出ていない。狼は標的へと迫っていることを感じながらも、その足を緩めようとはしなかった。

そして、飛び掛った。涎を撒き散らしながら顎を大きく開き、鹿の背に噛り付く。牙が肉に食い込み、久しぶりの血の味が舌に広がった。

鹿がバランスを崩して転倒する。狼もつられる様に地面に叩きつけられ、口が離れてしまったが、すぐに立ち上がった。鹿が起き上がる前に首筋を噛み、皮ごと肉を食い千切る。血が勢いよく噴き出し、後は小便の様に垂れた。鹿はもう動かない。狼は首筋から身体の方へと口を進めた。

腹が一杯になる頃には、鹿の原型は頭と足の先ぐらいしか残らなかった。

狼は満腹感と初めての狩りの成功に興奮していたが、その喜びを分かち合う仲間は何処にもいない。寂しさを紛らわすかの様に狼は吠えた。自分がいた群れでなくてもいい。狼は他の狼に、仲間会いたかった。

しかし、反応はない。こんな時、どうすればいいのかわからなくて、狼はまた歩き出した。

しばらくして昨日と同じように、冷えた雑草にその身を委ねた。

頭巾の少女

放浪は何日も続いた。狼は最初の狩り以来、失敗を重ねていた。怪我をしていない獲物達は想像以上に足が速く、持久力も兼ね備えていた。

そろそろ空腹に身体が音を上げようかというとき、別の狼の群れに出会った。しかし、その群れは狼を受け入れてはくれなかった。配偶者を探すには若過ぎたし、群れは群れ以外の狼を好まない。いわば狩りの競争相手のようなものだからだ。

一度、狩猟者にも遭遇した。群れで暮らしていた時も何度か襲われることはあったが、狼には共に逃げる仲間も家族もない。鹿のように平原を大きく蛇行し弾をかわし続けていくしかなかった。狼自身、それを情けないと感じていが、狩猟者相手ではそうする以外に生き残る術がない。

恐怖と冷たさで浅い眠りを繰り返すばかりの日々に足取りは重くなり、獲物を見つけてもそのまま無視してしまうことさえあった。ふと狩りに挑戦しても、近づく前に逃げられてしまうこともあった。それでも、狼は生き延びようとした。

空腹を堪えながら、地平線を目指した。

群れの仲間に会いたかった。

家族に会いたかった。

もう一度あのおいを嗅ぎたかった。

あの温もりに顔をうずめたかった。

体力が限界に達する直前、平原の最果てに辿りついた。

狼の前に、鬱蒼と木々や草花が生い茂る森林が広がる。狼は思わず後ずさりして、その森林を眺めた。平原にも時折木が伸びていたりするところもあったが、目の前の森は足の踏み場もないほどにそれが密集している。身の丈と同じくらいまで伸びている草花が、地

面を覆っていた。

しかし、狼が感じたのは恐怖ではなかった。

自信はなかったが、森の奥からどこか懐かしいにおいを嗅ぎ取ったからだ。

本能が、何かの気配を感じていた。

目を凝らすと、ずつと先に奇妙な木が一本生えているのが見えた。平原では見たことのない木であったのもそうだが、どうやらその周囲だけ平たい地面になっているようだ。しかし一番狼の興味を引いたのは、幾つかの木の枝から、丸い物体がぶら下がっていることだった。見るからに瑞々しいそれは丁度口にくわれそうで、獲物同様、不思議な魅力で狼の食欲を掻き立てた。狼には、それがどくどくと滴る血が凝縮したもののように見えた。

狼は草木を分けて、森の中へと入った。なんとか木の前まで辿り着くも、その物体は飛び上がったも寸でのところでは届かない位置にぶら下がっていた。魅力を振りまくだけ振りまいて、決して触れさせない——他の獲物と同じく、赤い物体は狼を見下ろしていた。

何度も跳躍しているうちに、木の根に足を取られてた。転倒した狼は自分のしていることの愚かしさに気づいているのかいないのか、それでも跳び続けた。

どこか、懐かしいのだ。それが何であるのか、決めようにも狼は自信がない。そんな曖昧な希望が、どうしてか狼を動かすのだ。

しばらくして、草の擦れる音がした。狼のものではない。こちらに近づいてくると悟った時、狼は音のする方と反対方向の草木の陰に身を隠した。

息を潜めて様子を窺っていると、向こうから人間の少女が少女が現れた。年は十歳前後、フリルのついたブラウスに、白い前掛けを下ろした茶色のスカート。そして何よりも特徴的なのが、少女の頭をすっぽりと覆っている赤い頭巾だった。まだあどけない頭巾の少女は、手に身の丈以上の長い棒を持ち、木製の編みこまれた籠を肘に掛けていた。

少女は、木の根を兎のように飛び越えて物体をぶら下げる木の前までやってきた。籠を根元に置こうと身を屈めた少女の頭部は、狼の位置からは頭巾しか見えなくなる。枝に実っている物体にそっくりだと、狼は感じた。

少女は長い棒を両手に持ち替え、赤い物体に向けて伸ばした。バランズを取りながら、少女はもう棒の先端で物体を突き揺らす。叩く度にゆらゆら揺れて、棒を当てていくほどそれは大きくなった。そして、一回転しようかというところで物体が枝から離れた。重力に従って落下したそれを、少女は拾い上げて籠に入れる。それを何度か繰り返し、小さな籠が一杯になるまで彼女は採り続けた。

一杯になった籠を見ると、少女は満足そうにその場を去ろうと元来た茂みの中へ入っていった。

同時に、狼もまた動いた。足元にあった枝を踏みつけて、わざと大きな音を立てる。

少女がはつとなつて振り向く。視線が交差し、森の隙間を縫った風が、狼の毛並を、少女の茶色い前髪を揺らした。

しばらく、葉の擦れ合う音だけが響いた。

狼は、途端にどうするべきか迷った。今はとてつもなく空腹で、目の前にいる少女は肉だ。少女の持つ赤い物体は何だ？ 食べるのか？ 満たされるのか？ どちらにしろ食べてみたい。

赤い頭巾の少女は狼を見て驚いたようだったが、逃げようとはしなかった。むしろ、茂みの中から顔だけを出した狼に近づいていく。狼は狼狽したが、心臓が激しく脈を打つのに対して身体はぴくりとも動いてくれない。今自分を支配しているのは、少なくとも恐怖ではないはずなのに。

得体の知れない、全身が総毛立つような何かが狼に自由を与えてはくれなかった。少なくとも、少女がいなければこんなことにはならなかっただろう。

少女はしゃがんで、狼と目線の位置を合わせた。そして籠に積まれた物体を一つ取り出すとそれを狼の前に置いた。そして、につこ

りと微笑んだ。

狼にはそれが何を意味しているのか理解できなかった。息を荒くしながら、目の前に置かれた物体と少女の笑顔を交互に見やる。

伸ばした舌から涎が垂れ落ちた。次の瞬間には、何のためらいもなくそれに齧りついた。肉よりも硬い食感で、血よりもずっと甘い汁が口の中に広がった。中には一際硬い部分もあって、食べられそうにない箇所もあったが、その部分を残してあつという間に平らげてしまった。

少女は狼の食事を見届けると、今度こそ森の中へと消えていった。狼はそれを追いかけなかった。追いかけようとしたのだが、また身体が奇妙な感覚に支配されたのだ。これは懐かしさか、真新しさか、それとも別の何かなのか。

狼は自らの内に芽生えた何かの正体がわからなかった。

唯一、口の中の後味だけがはつきりと残っていた。

疾走

その日の夜が来ると、狼は今までとは違う理由で寝付けなかった。森にいるからではない。あの少女と出会ってから、狼は彼女のこと、で頭が一杯になっていく。頭のなかから離れない少女の面影に、息が詰まる。どう対処していいのかわからず、狼は森の中を走り出した。

不思議と、木の根や草花に足を取られることはなかった。掻い潜るように森の中を進んでいく。呼吸はますます荒くなったが、爽快な風を受けると気が楽になる。そして、自分の中の感情に支配されるのではなく、身を任せることができるようになった。内側から来る燃え上がるような何かに、今までずっと抵抗していただけなのだと気づいた。

森を駆ける狼には今、宛があつた。

赤い頭巾の少女だ。

彼女にもう一度会いたい。

少女のおいははつきりと覚えている。

これだけは自信がある。

狼は今、そのおいを頼りにひたすら走っている。

右往左往するのではなく、おいのなる方へ、右へ、左へ。

会って何をしようというのか、狼はそこまで考えが行き渡っていない。

ただ、再び会うことが出来ればいいのだ。

出会って、この内側から湧く得体の知れない何かの正体を知りたい。

——しかし、一体どうやって？

狼は、少し減速しながら考えた。考えたことなど、これまでにあっただろうか。

少女に、何をどうやって伝えればいいのだろう。どうすれば伝わ

るだろう。

段々と足の回転が弱まってゆく。自分でも気づかぬうちに、平原を放浪していたときのような足取りに戻っていた。あの宛のなかった頃に、つい昨日までのことだったのに、随分と遠い日の出来事だったかのようだ。

少女はまるで狼の考えを察したかのように、彼女が採った物体を分け与えてくれた。しかし狼は、まるで少女のことが理解できていない。

狼の頭の中に渦が生まれた。振り回されるかのように、足元が覚束なくなる。木の根につまづき、何度も転びそうになった。

狼は迷っていた。本当に少女に会うべきだろうか。会いたい。だが、会ってどうするべきか。そもそも会ってもいいのだろうか。

今までほとんど本能のみで生きてきた狼に、未知の事態が襲い掛かってきていた。先ほどから、自分の内側からここぞとばかりに溢れてくる何か。正体不明の何かに苦しめられているような感覚に、狼は眩暈を覚えた。死ぬ危険はないのに、同じくらいに恐ろしい。

だが、立ち止まりはしなかった。

今までと決定的に違うのは、不思議と孤独を感じないことだった。狼を今もなお引き寄せているにおいは、紛れもなく赤い頭巾の少女のものだ。

ふと、視界の隅にあの物体がぶら下がっている木が見えた。しかし、もう一つしかない。

狼は、他のものは全てあの少女が取ったのではないかと直感した。確かに、その物体だけが先ほどの木に実っていたものよりずっと高い位置にあった。少女が棒を伸ばして叩き落すには難しい高さだ。幸いなことに、物体を繋ぎとめている枝は少女の努力の甲斐あってか半分折れかかっている。

狼は何歩か下がって、助走のための距離を取った。

瞳を物体ではなく木の幹に向けて、狼は走り出した。全速力で距離を貪り、木に向かって飛び掛る。

獲物とは違い逃げも隠れもしない木の幹にぶつかる寸前で、狼は体勢を入れ替え、後ろ足で幹を蹴った。先ほどとは間逆の方向へ、一際高く跳躍する。そして、物体のぶら下がる枝目がけて口を伸ばした。

顎が捕らえたのは、同じ枝から生えていた一枚の葉だったが、木の枝は狼の体重でしなり物体は枝ごと宙に舞った。

狼は先に着地し、再び跳んだ。空中で物体を今度こそ捕まえ、そのまま一思いに噛み砕いた。

じわりと広がる味。

舌で味わいながら、ふと思った。

——美味しい。

着地とほぼ同時に、狼は疾走を再開した。

疾走、そして……

狼は、自分の内側にある何かが気にならなくなっていた。走っているうちにその正体を知ろうとすることは無駄なことだとわかった。内側にある何かは、初めからそこにあっただ。狼が知るよりもずっと前から、存在して、ただそれに気づいていなかったただだ。どこまでも続く樹海を、狼は迷いなく突き進む。赤い頭巾の少女のにおいのする方へ。

近づいている実感があつた。疲れてはいるが、全身に浴びる風が心地よい。

もう狼は迷わない。
吠える。

リズムを刻む四つの足に、自覚なき変化が訪れた。

前足が段々と浮いていき、宙を掻き始める。

後ろ足だけで地面を叩く。膝の関節の向きが変わる。大きな音を立てたにも拘らず、狼は意にも留めない。

目線の位置が高くなる。風に靡く体毛が、向かい風にも負けず頭部へと集まってゆく。

もう一度、吠える。

「に！ に、に」

今までとは違う雄叫びが、森の中を木霊する。

四本足の指の数が増える。爪は平たく、指に吸い付くように密着した。

肉球が内側に吸い込まれ、毛のなくなった指先に渦のような指紋を描く。

前足の指が伸びていき、手の形へと変わった。

尻尾は縮み、そのまま消えてしまった。

牙は衰えたのか、平たい奥歯が口の中に生えた。

瞳は白と黒に、顔も平べったくなり、口と鼻もそれに引き寄せら

れた。

視界に、色がつき始めた。狼はそれを不思議だとは思わなかった。森は、深い緑色をしていた。花はそれぞれ赤や黄色、桃色と違う色をしていた。

三度、吠える。

「に、にんげん！ にんげんに——」

そのとき、太い木の根が足首に引っかかった。前方へ派手に転がり、何度か前転した後、樹木にぶつかって止まった。

「……………」

狼——狼であつたはずの存在は、自分の両手を見た。紛れもない人間の手だった。綺麗な肌色をしている。視線を身体の下へと向けていくと、人間の素足が二本、自分の身体から生えていた。尻尾はなくなっていて、股間の器官も形が微妙に変わっていた。

「あ、あ」

身に起こつた事態に、思わず声が出た。そしてそのことにまた驚かされる。とても自分の喉から出ているとは思えないほど、聞き覚えのない声音だった。

全身が震えてきたが、それが恐怖でないことだけはわかる。

変貌を遂げた狼——十歳半ほどの少年は、歡喜を堪えきれずに吠えた。誰にでもなく、自分に向けた遠吠えだった。

森の中を駆け抜けているうちに、夜が訪れた。ふと彼が足を止めて上を見ると、葉の間から覗く空が暗くなっていた。紺色の中に、輝く幾つもの点が見えた。

——もう夜になっていたのか。

そう思うと、どっと疲れが押し寄せてきた。膝を折って、木の根を枕に仰向けに倒れる。激しい呼吸で、お腹の辺りが上下する。体中を汗が伝う。それがやけに気持ち悪い。

だが、森を流れる涼しい風を受けているうちにその汗も引いていった。快い気分になり、瞼は重くなっていった。

少年は、久しぶりの深い眠りの中に落ちていった。

再会

目を覚ますと、木の葉の合間から見えていた空の色が夜とは変わっていた。この色が朝なのだということは理解していた。

同時に、彼はある異変に気がついた。素早く身を起こして辺りに気を配る。

昨日まであったものが、なくなっている。

「においが……」

少女のにおいが、しない。

嗅覚が衰えたわけではなかった。木のおい、草のおい、土のおいとはつきりとわかる。少女のにおいだけが、まるで昨日に取り残されてしまったかのようにすっぱり抜け落ちているのだ。鼻に神経を集中させても、手応えはない。

額から汗が零れ落ちる。昨日の汗とは、量も気味悪さも違う。内側にある何かが崩れてしまいそうだった。人間はこの程度の汗に、こんなにも揺さぶられてしまうのか——少年は立ち上がることさえ叶わなかった。

風に吹かれた森のざわめきが、一層不安を煽る。何処からか運んできた不安を、彼の内側へ積もらせていく。その重さに負けそうになったところに、物音が聞こえてきた。前方から聞こえてくる木の葉を踏む音は、徐々に近づいてきている。

「わっ！」

「えっ!？」

音の主が木の陰から突然現れると、彼は声を上げて驚いた。現れたのは少女だった。彼の声に彼女も小さく悲鳴を上げ、

「……………」

「……………」

一転、顔を赤くして二人とも息を呑んで押し黙った。

とりあえず彼は立ち上がった。少女と出会えたのはよかったが、

少年はいざそうなると何をすればいいのかわからなくなった。何も言葉が浮かんでこない。折角喋れるようになったのはいいが、これではどうしようもない。

少女は昨日と同じ頭巾、同じ服を身にまとっていた。ブラウスと前掛けは雲のように白く、スカートは地面と同じ茶色だった。そして、大きな頭巾と籠の中の木の実、共に綺麗な赤色をしていた。

そして、同じ——いや彼以上に驚きのこもった表情をして、裸の少年を見ていた。背丈は少年の方が頭半分ほど高い。

「あなたは……」

少女が呟く。咄嗟に少年は何か答えなければと思い、自分の胸を強く叩いた。

「お、おれ、にんげん！ き、きみと、いつしょ！」

少年はちゃんと言えた気がして、少女に伝わった気がして、嬉しくなった。鼓動が強まる。心臓も、内側にある何かも激しく動いていた。

……当の少女の方と言うと、曖昧に頷くだけなのだが。

「これは、なに？ これっ」

少年は構わず一歩踏み出して、また自分の胸を叩いた。

「きみにも、あるの？」

少女はしかし、首を傾げた。これと言われても少年が胸のことを言っているのか、手のことを言っているのか、それとも別の何かなのか区別がつかない。

「……………どれ？」

「これだよ！」

意味を測りかねた少女の手首を掴むと、少年は自分の胸に彼女の手を無理矢理押し当てた。

何故かはわからないが、胸の鼓動は一層激しくなった。少女にも、その震動が伝わってくる。視線が交差し、少年は急に少女に見つめられているのが急に恥ずかしくなった。

それは少女にとっても同じことだったらしく、彼女は少し顔を赤

らめて視線を下へと移した。必然的に、少年の下半身に目が行く。彼女の頬が、夕焼けに染まった。まだ日は沈んでいないというのに、不思議に思った少年も、自分の下半身へと目を向けた。股間からそそり立っているモノを見ていたら、天啓のようにある言葉が頭に浮かんだ。彼はこんな状態のことを知っていたし、何より言葉が浮かんできたことが嬉しかった。

「これ、興奮！」

「……………」

親切心で教えたつもりだったが、少女の顔は逆に引きつった。彼自身も、何故自分が興奮しているのかわかっていない。とりあえず、この興奮は彼女のおかげだった。獲物を前にしたときなどにこれに近い感覚が訪れるのだが、それとは少し違う気もするし、同じような気もする。

少年が考えている間に、彼女はそつと少年の胸から手を離れた。胸に触れていた温もりが、すつと冷めてゆく。

「と、とにかく、人間なら服を着てくれない？」

少女は目を宙に向けながら言った。先ほどの少年と同じくらい言葉がつかえている。

「ふく？」

「そつ、服。裸で外を歩くのは人間じゃないわ」

少女は自分のスカートの裾をつまんでみせた。だが少年は、

「じゃあ、おれって、何？」

と真顔で聞くので、少女は返答に困った。

少し考えてから、少女はぽんと手を叩いた。

「と、とにかく、私の家に服があるから。それを着て。ね？」

「う、うん」

じゃあついてきて、と彼女が言うので、少年は大人しくその後が続いた。

後姿の少女の後頭部は頭巾にすっぽりと隠れていた。赤い頭巾は彼女の頭を包み込むように丸まっていて、籠の中の木の実とそつく

りだった。

前を歩く少女に気づかれないほどの小さな音が、腹から鳴った。

少女の家

少女に連れられ森の奥へと進んでいくと、不自然に開けた場所に
出た。平原のように背の低い雑草や花がなく、木々の代わりに木
造の小屋が一軒、ぽつんと建っていた。

「ここよ」

と、少女は木製のドアを開けた。少年は導かれるようにして小屋
の中に足を踏み入れる。少女が彼の足の汚れに気づいたのは、その
すぐ後だった。

「あ、ちよつと！」

少年は気にも留めず、土色の足跡を残してゆく。少女は彼を追っ
ながら、それを一つ一つ布で拭き取っていた。

少年は小屋に入ってすぐの広間ではたと足を止めた。長方形のテ
ーブルの長い辺に沿って肘掛椅子が二つずつ並んでいる。奥の方に
カウンターで仕切られている台所も見えるが、立ち止まった理由は
そのいずれでもない。

においだ。懐かしいにおいがする。もう何日も嗅いでいなかった
せいか、嗅いだことがあるという記憶しか残っていない。そのにお
いの正体すら曖昧模糊として判断がつかない。においのする方へ顔
を向けると、部屋の手前の隅から階段が伸びていた。二階へと続く
ものだ。近づこうとしたとき、誰かに手首を掴まれた。

振り返ると、少女が顔をしかめていた。もう片方の手にすっかり
汚くなった布切れを持っていた。よく見ると、それはついさっきま
で彼女の腰に巻かれていた前掛けだった。

「あなたの服を持ってくるから、これでちゃんと足を拭いて」

少年の手にその布を持たせて、彼を椅子に座らせる。そして「こ
うやって拭いて」と布をもった彼の手を足の裏に持ってきて、ごし
ごしと擦ってやった。少年はくすぐったかったが、少女の怒りを視
線と気配で察し、おとなしく従うことにした。

彼女は先ほど彼が上ろうとした階段の向こうへ消えていった。少年が両足を拭き終える前に、彼女は丁寧に畳まれた服を両手で抱えて戻ってきた。白いワイシャツにこげ茶色の長ズボン、シンプルな無地の下着。奇麗に畳まれたそれらの上に、ズボンと同色の中折れ帽子が乗っかっている。

少女の助けを借りて——ほとんど着せられるようにして——少年はそれらを身にまとっていった。シャツもズボンもサイズが合わず袖が余ったが、帽子だけはやけに窮屈だった。きついので脱ごうとすると、少女が「絶対に駄目」だと言うので我慢せざるを得なかった。

その間もずっと、彼は懐かしいにおいに気を取られていた。

「においが、する」

「え？」

鼻をぴくぴくと動かし、少年は少女の制止を振り切って階段を駆け上がった。二階は短い廊下の壁に、左右一つずつドアがあるだけだった。少年は迷わず向って右のドアを開ける。においはそこからしていると確信していた。

開けた先は寝室のようで、小さな机と大きなベッドが部屋の奥に置かれていた。そのベッドの掛け布団から、老婆の顔が覗いている。ふんわりとした帽子を目深に被っているが、皺くちやの顔は隠しきれていない。小さく開いた口から微かに呼吸の音が聞こえる。老婆は少年が入ってきたことに気づいたのか、重たそうに瞼を開けて、首をドアの方に向けた。

「……………」

少年はベッドの傍まで歩み寄り、老婆の表情を窺った。そのとき追いかけるようにして少女がやって来たのだが、少年は気づかなかった。

においは、老婆からのものだった。

「きみは、だれ？」

「……………」

少年の問いに老婆は答えない。瞳は確かに少年を見ているのに、隙間風のような呼吸しかない。

そんな老婆を見ると、少年は自分の内側にある何かがつずくを感じた。そつと老婆の頬に手を滑らせ——爪を立てる。

「……たし、は………」

「？」

老婆が何かを呟いたので、咄嗟に少年は手を離した。

「……わ、たしは、あの子が」

「あのこつて、だれ？」

「あの子が、生きて、くれていれば……」

「ねえ、あのこつて——」

言い終える直前に、少女が少年の肩を叩いた。老婆はそれ以上何も言わなかった。

「私、また森に木の実を採ってくるから、下で待ってて」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8530z/>

狼の赤い寄り道

2011年12月27日22時50分発行